



Title	新出土資料関係文献提要（九）
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2008, 46, p. 91-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新出土資料関係文献提要（九）

草野友子

本提要は、『中国研究集刊』結号（総四十二号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（八）」の続編である。前回同様、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）・上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）に関する文献を主対象とした。前半は中文書、後半は和書である。

『上海博物館蔵戦国楚竹書（六）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇七年七月、三三八頁、縦組繁体字）

上博楚簡の図版（写真版）と釈文考釈とを収録した書の第六分冊（第一分冊・第二分冊は提要（一）、第三分冊は提要（四）、第四分冊は提要（六）、第五分冊は提要（八）で解説済み）。本巻には、『競公瘡』『孔子見季桓子』『莊

王既成 申公臣靈王』『平王問鄭寿』『平王与王子木』『慎子曰恭儉』『用日』『天子建州』の九篇が収録されている。

「図版」（写真版）と「釈文考釈」との二部よりなる。

『競公瘡』の原釈文担当者は、濮茅左氏である。全十三簡（全て残簡）で、篇題は第二簡背面に「競公瘡」とある。「競公」とは春秋時代の斉の景公のことであり、本篇は、景公が「瘡」の病にかかったことよって引き起こった朝廷内部の論争が記されている。本篇は、斉国の歴史・宗教・哲学・医学・治国の策略、及び『晏子春秋』の材料・成書年代など、多方面の研究に価値のある史料を提供している。

『孔子見季桓子』の原釈文担当者は、濮茅左氏である。全二十七簡（全て残簡）で、元々篇題はなく、冒頭句より取る。本篇は、儒家の重要な佚文である。全文が対話形式で、孔子と季桓子との談話が記されている。

『莊王既成 申公臣靈王』の原釈文担当者は、陳佩芬氏である。全九簡で、『莊王既成』と『申公臣靈王』の二篇からなる。『莊王既成』は、無射を製造した楚の莊王と重臣沈尹筮とが、楚の後の王（子孫）が覇者の地位を保つことができるかについて問答しているものである。『申公臣靈王』は、楚の王子圉（後の靈王）と陳公子皇（穿封戌）との間に起こった、捕虜（鄭の皇子、皇頡）をめぐる争いについて記されたものである。

『平王問鄭壽』の原釈文担当者は、陳佩芬氏である。全七簡で、元々篇題はなく、内容に基づいて名付けられた。本篇は、楚の平王が国の「禍敗」について、鄭壽（おそらく、卜尹の親従）と問答しているものである。

『平王与王子木』の原釈文担当者は、陳佩芬氏である。全五簡で、元々篇題はなく、冒頭の句に基づいて名付けられた。本篇は、楚の王子木（太子建）が楚の平王に命ぜられて城父に至った際のことと記されている。

『慎子曰恭儉』の原釈文担当者は、李朝遠氏である。全六簡で、篇題は第三簡背面に「慎子曰恭儉」とある。本篇の内容は、現存する各種版本の『慎子』には見られず、むしろ儒家の学説と関連するようでもあり、この「慎子」と伝世文献中の「慎子」（慎到）とは同一人物と見なせるかどうか、今後の研究が待たれる。

『用日』の原釈文担当者は、張光裕氏である。全二十簡で、元々篇題はなく、篇中に多く見える「用日」を篇名とした。「用日」とは、「諺曰」「鄙諺曰」「古語曰」等に相当し、世の中の人々に対する訓戒、実際に役立つ言葉、及び伝世文献に見られるような諺が記されている。

『天子建州』の原釈文担当者は、曹錦炎氏である。甲本と乙本とがあるが、内容は同じである。甲本は全十三簡、乙本は第十二簡・第十三簡が失われており、現存するのは十一簡である。本篇は、儒家文献であり、主に「礼」制に関することが記されている。そこには『大戴礼記』『礼記』と類似する記載が見られ、先秦時期の礼学を研究する上で貴重な資料を提供している。

『上海博物館藏戰国楚竹書（四）』読本（出土文献訳注研析叢書P026、季旭昇主編、袁国華共編、陳思婷・張継凌・高佑仁・朱賜麟合撰、万卷楼圖書股份有限公司、二〇〇七年三月、二九八頁、横組繁体字）

『上海博物館藏戰国楚竹書（四）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇四年十二月）として公開された文献七篇（『采風曲目』『逸詩』『昭王毀室 昭王与龔之脾』『東

大王泊旱』『内礼』『相邦之道』『曹沫之陳』に対する釈文・現代語訳・注釈等を収載した書。

第四分冊の全文献について、各々「題解」（該当文献についての簡易な解説や竹簡の再排列案の提示等）、「釈文」、「語訳」（現代中国語訳）、「注釈」（伝世文献の類似文章との比較、字形の解説、語句の解説等）が掲載されている。巻末には、文字を対照させるために、各文献の竹簡の文字を模写したものと、隸定後の文字とを並べて掲載している。

内容的に注目されるのは、『上海博物館藏戰国楚竹書（四）』の原釈文と異なる釈読を提示している箇所が見られる点であり、各文献の解説の際に有益な資料となろう。

なお、すでに刊行されているものとして、『上海博物館藏戰国楚竹書（一）』読本（出土文献訳注研析叢書P017、季旭昇主編、陳森慶・鄭玉珊・鄒濬智合撰、万卷楼圖書股份有限公司、二〇〇四年六月。提要（六）で解説済み）、『上海博物館藏戰国楚竹書（二）』読本（出土文献訳注研析叢書P016、季旭昇主編、陳美蘭・蘇建洲・陳嘉凌合撰、万卷楼圖書股份有限公司、二〇〇三年七月。提要（二）で解説済み）、『上海博物館藏戰国楚竹書（三）』読本（出土文献訳注研析叢書P022、季旭昇主編、陳惠玲・連德榮・李綉玲合撰、万卷楼圖書

股份有限公司、二〇〇五年十月。提要（八）で解説済み）がある。

『簡帛』第一輯・第二輯（武漢大学簡帛研究中心主辦、上海古籍出版社。第一輯、二〇〇六年十月、五一五頁。第二輯、二〇〇七年十一月、五四〇頁。横組繁体字）

武漢大学簡帛研究中心が主宰する専門の学術集刊。①戦国文字を主とした古文字研究、②簡帛を主とした先秦・秦漢出土文献の整理と研究、③簡帛資料を主な着眼点とした先秦・秦漢史研究及び研究動向・評論紹介・資料的文字、という三つの層で構成されている。

第一輯には、四十七篇の論文が収録されている。その内、郭店楚簡に関する論文は五篇（『五行』『性自命出』『語叢（四）』）、上博楚簡に関する論文は十篇（『從政』『容成氏』『周易』『恒先』『東大王泊旱』『内礼』『曹沫之陳』）である。本書に掲載されている論文のうち六篇は、日本人研究者（谷口滿・大西克也・工藤元男・福田哲之・廣瀬薫雄・水間大輔、掲載順）によるものである。また、「德国漢堡大学亞非学院中国語言文化系的中国写本研究」、「關於早稻田大学的中国簡牘研究」、「1900年以来出

土簡帛一覽」が掲載されている。

第二輯には、二〇〇六年十一月に開催された「中国簡帛学国際論壇」にて発表された論文四十四篇が収録されている。その内、郭店楚簡に関する論文は九篇（『五行』『老子』『太一生水』『緇衣』『尊德義』『成之聞之』『性自命出』）、上博楚簡に関する論文は十七篇（『子羔』『民之父母』『緇衣』『孔子詩論』『彭祖』『姑成家父』『周易』『恒先』『性情論』『采風曲目』『容成氏』『東大王泊旱』『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』『君子為礼』『三德』）である。また、本書に掲載されている論文のうち三篇は、日本人研究者（廣瀬薫雄・浅野裕一・藤田勝久、掲載順）によるものである。

年一度の刊行予定であり、今後の簡帛研究にとって有益な学術集刊となろう。

『楚竹書《周易》研究』（上）・（下）（濮茅左著、上海古籍出版社、二〇〇六年十一月、一〇四五頁、縦組繁体字）

上博楚簡『周易』を主とした総合的な『周易』の研究書。「兼述先秦兩漢出土与伝世易学文献資料」という副題

が付されている。『上海博物館藏戰国楚竹書（三）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇四年三月）において、『周易』の原釈文を担当している濮茅左氏によるものである。

上篇は、「楚竹書《周易》研究」として、上博楚簡『周易』についての総合的な検討がなされている。まず、「楚竹書《周易》導言」において、近年來の戦国楚簡研究について記している。第一章「楚竹書《周易》概況与研究」では、上博楚簡『周易』の研究概要、命名、符号、及び文字について記されている。第二章「楚竹書《周易》原文考釈」では、各卦の詳細な釈読を掲げている。附録として、「楚竹書《周易》原文」、「竹書・帛書・今本比較表」、「楚竹書《周易》詞目解釈」、「楚竹書《周易》逐字索引」が掲載されている。

下篇は、「先秦兩漢出土与伝世易学文献資料」として、『周易』に関する資料を豊富に収録している。第三章「考古易的發現」では、甲骨文・今文・その他の器物・各種竹簡・馬王堆漢墓帛書・漢石經に見られる易卦について記されている。第四章「伝世文献中的易学記載」では、先秦兩漢等の文献中の易学に関する記載、歴史上の『周易』の典籍、及び今本『易経』とその伝について記している。巻末には、参考・引用した論著目録が掲載されている。

る。

上博楚簡『周易』のみならず、伝世文献、出土文献、さらには器物に至るまで、『周易』に関するものを網羅した重厚な研究書であり、今後の『周易』研究にとって非常に有益な資料となろう。

『上博楚簡思想研究』（曹峰著、万卷楼圖書股份有限公司、二〇〇六年十二月、二八六頁、横組繁体字）

上博楚簡『孔子詩論』『魯邦大旱』『恒先』『三徳』を主な研究対象として、その言語や思想的特徴等を分析した研究書。

第一章から第三章は『孔子詩論』を取り上げ、釈読、竹簡排列案の再検討、着眼点を絞った考察等がなされている。各章の題目は以下の通り。第一章「『孔子詩論』的留白簡・簡序・分章等問題」、第二章「『孔子詩論』中有関「閔雎」的幾支簡」、第三章「『孔子詩論』中有関「木瓜」的幾支簡」、第四章「『色』与「礼」的関係——『孔子詩論』・馬王堆帛書〈五行〉・《孟子・告子下》之比較」。第五章「『魯邦大旱』思想研究」では、『魯邦大旱』を

取り上げ、その思想的特徴を考察している。

第六章から第八章は『恒先』を取り上げ、釈読、竹簡排列案の再検討、政治哲学の方面からの考察等がなされている。各章の題目は以下の通り。第六章「『恒先』的編聯与分章」、第七章「『恒先』政治哲学研究」、第八章「『恒先』釈義四題」。

第九章から第十三章は『三徳』を取り上げ、釈読、竹簡排列案の再検討、黄帝や黄老思想との関係についての考察等がなされており、『三徳』の内容を黄老思想に関連づける点に特色がある。各章の題目は以下の通り。第九章「『三徳』的編聯与分章」、第十章「『三徳』釈読十八則」、第十一章「関於『三徳』9号簡文的釈読」、第十二章「『三徳』所見「皇后」為「黄帝」考」、第十三章「『三徳』与《黄帝四経》对比研究」。

本書は、『上博楚簡思想研究』というタイトルではあるが、上記四篇のみの個別研究となっている。

『楚地簡帛思想研究（三）』（丁四新主編、湖北教育出版社、二〇〇七年六月、七〇八頁、横組繁体字）

二〇〇六年六月二十六・二十八日に武漢大学で行われた「新出楚簡国際学術研討会」にて発表された論文を再編集した論文集。五十九篇の論文が収録されており、中国のみならず、日本・アメリカ・オーストラリア・ハンガリーの研究者の論文も掲載されている。

上博楚簡に関する論文が最も多く、三十九篇の論文が掲載されている。その内、第五分冊所収の文献に関する論文が約半数を占めている。また、郭店楚簡に関する論文九篇が掲載されている。その他に、九店楚簡・新蔡葛陵楚簡・馬王堆漢墓帛書・睡虎地秦簡等に関する論文も掲載している。また、本書に掲載されている論文のうち七篇は、日本人研究者（福田哲之・浅野裕一・西山尚志・谷中信一・荻野友范・竹田健二・中嶋隆藏、掲載順）によるものである。

「新出楚簡国際学術研討会」にて発表された論文全てが収録されているわけではなく、儒家系文献に関する論文については、後述の『儒家文化研究』第一輯に収録されている。

なお、すでに刊行されているものとして、『楚地出土簡帛文献思想研究（一）』（丁四新主編、湖北教育出版社、二〇〇二年十二月。提要（二）で解説済み）、『楚地簡帛思想研究（二）』（丁四新主編、湖北教育出版社、二〇〇

五年四月。提要（七）で解説済み）がある。

『儒家文化研究』第一輯（郭齐男主編、生活・読書・新知三聯書店、二〇〇七年六月、四六三頁、横組繁体字）

儒家に関する論文を収載した論文集。本号は「新出楚簡研究専号」として、二〇〇六年六月二十六・二十八日に武漢大学で行われた「新出楚簡国際学術研討会」にて発表された論文のうち、儒家系文献に関する論文を再編集した論文集となっている。中国・台湾・アメリカ・日本・カナダ・ベルギー・ロシアの研究者による新出楚簡の哲学思想・宗教観念・政治意識及び学派帰属等についての研究論文二十一篇が収録されている。論文の大多数は、郭店楚簡・上博楚簡を取り上げたものである。また、本書に掲載されている論文のうち二篇は、日本人研究者（湯浅邦弘・福田一也、掲載順）によるものである。卷末には、「新出楚簡思想研究論著要目」が掲載されている。本書は、儒家の学術・思想・文化の諸問題を探究・検討した専門書であり、根源性と多元性、学術性と思想性、理論性と現実性、重厚感と前治性を編纂主旨としている。儒学史の前史・原始儒学・漢唐儒学・宋明学・現代新

儒学・儒家人物思想・儒家經典・儒家哲学・儒家倫理学・儒家社会政治理論等、多方面の研究論著を主要内容とし、さらに諸子学・玄学・道教・仏教・回教・各兄弟民俗宗教文化・西学・現代西方人文社会科学説と儒家との関係を取り上げた研究論著をも重視しているとのことである。よって、今後、幅広い分野の研究論文の掲載が期待される。

なお、本書に収録されていない「新出楚簡国際學術研討会」の論文は、前述の『楚地簡帛思想研究（三）』に収録されている。

『上海博物館藏戰国楚竹書（一—五）文字編』（李守奎・曲冰・孫偉龍編著、作家出版社、二〇〇七年十二月、一〇〇五頁、縦組繁体字）

『上海博物館藏戰国楚竹書』の第一分冊から第五分冊までの楚文字を網羅した字書。第五分冊までの全ての文字・標点符号が収録されている。また、『香港中文大学文物館藏簡牘』掲載の楚簡十点もあわせて収録している。

文字の排列は『説文解字』により、『説文解字』に見られない文字については部首に従って排列している。字頭

が二〇九六個、単字が一七五九〇個。記載形式としては、枠外に釈文（楷書体）、小篆、隸定の順に掲げ、枠内に楚文字（竹簡の写真を取り込んだもの）とその出処の略記（例えば、第一分冊所収『孔子詩論』第二十二簡の三十一字目の場合、「一・孔子 22・31」）が掲載されている。

また、按語（注釈）は一四〇〇余条に及び、楚文字の音読・構形・異文について、『説文解字』古文との関係、後世の字書の同形字との関係等について記している。

附録として、合文、重文、存疑、残文、標識符号、各文献毎の釈文が掲載されている。巻末には、部首検字表と拼音検字表とがあり、文字の検索に便利である。

本書は、上博楚簡に関する総合的な字書としては初のものであり、戦国楚簡研究にとって必須の工具書となる。また、『楚文字編』（李守奎編著、華東師範大学出版社、二〇〇三年十二月。提要（五）で解説済み）の続刊と見なせるものであるため、文字学研究にとっても非常に有益な資料である。今後、第六分冊以降も含めた字書が刊行されることを期待したい。

なお、郭店楚簡に関する字書として『郭店楚簡文字編』（張守中・張小滄・郝建文撰集、文物出版社、二〇〇〇年五月。提要（一）で解説済み）がある。

『郭店楚簡の研究』第六卷・第七卷（大東文化大学郭店楚簡研究班編、大東文化大学大学院事務室。第六卷、二〇〇五年三月、二二三頁。第七卷、二〇〇六年三月、二六八頁。縦組和文）

郭店楚簡『性自命出』の訳注と関係論著目録とを収録した書（第六卷に「その三」、第七卷に「その四」。第四卷より始まった『性自命出』の訳注は、第七卷をもつて完結）。大学院ゼミの成果をまとめたものである。訳注の底本には文物本を用いている。

「その三」では、第五十号簡～第六十七号簡までを、「その四」では、第二十一号簡～第三十五号簡までを掲載している。第七卷に第二十一号簡～第三十五号簡までが掲載されたことについては、授業の時間に行っているという教育上の事情によることが序文に記されている。

「本文」「訓読」「口語訳」「注」からなり、非常に詳細な「注」を備えている。また、『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇一年十一月）所収の『性情論』が、『性自命出』と同じ楚系文字を用い、同じ時代に楚国で抄写された、同じ内容を有する儒家の思想文献であるため、『性情論』をも検討の対象

としている。郭店楚簡『性自命出』・上博楚簡『性情論』はもとより、儒家の性論を再検討する上でも、非常に有益な資料となるう。

なお、本書の第一巻には『太一生水』『窮達以時』の訳注・関係論著目録、第二巻には『魯穆公問子思』『忠臣之道』の訳注・関係論著目録、第三巻には郭店楚簡に関する論文、第四巻には『性自命出』の訳注「その一」・関係論著目録、第五巻には『性自命出』の訳注「その二」・関係論著目録が収録されている（提要（一）、提要（八）で解説済み）。

『上海博楚簡の研究（一）』（大東文化大学上海博楚簡研究班編、大東文化大学大学院事務室、二〇〇七年三月、二六六頁、縦組和文）

上博楚簡『周易』の訳注と関係論著目録とを収録した書。大学院ゼミの成果をまとめたものである。底本には、『上海博物館藏戰國楚竹書（三）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇四年三月）所収の『周易』を用いている。

まず、「関係論著目録」として、上博楚簡『周易』について論じた著書・雑誌論文・インターネット論文などを順次列記している（掲載されている論著は、二〇〇六年十二月までのもの）。

次に、上博楚簡『周易』訳注「その1」として、第一簡から第十五簡まで（蒙卦・需卦・訟卦・師卦・比卦・大有卦・謙卦・豫卦）の訳注が掲載されている。それぞれ「本文」「訓読」「口語訳」「注」からなる。とりわけ「注」は非常に詳細であり、通行本・馬王堆本・阜陽漢簡本等との比較もなされているため、『周易』の研究において有益な資料となろう。

なお、本書は、一九九九年から二〇〇六年に刊行された『郭店楚簡の研究』（前掲書）の後継雑誌に当たり、今後継続した刊行が期待される。

『上博楚簡研究』（湯淺邦弘編、汲古書院、二〇〇七年五月、四八七頁、縦組和文）

上博楚簡について、中国哲学研究与中国古文字学研究の専門家からなる「戦国楚簡研究会」の共同研究の成果をまとめた書。

本書は、上博楚簡に関する論文十八篇を収録し、その内容は、主に上博楚簡の第四分冊・第五分冊所収の文献に関するものである。第一部「総論」、第二部「思想史研究」、第三部「字体・竹簡形制研究」の三部構成である。

第一部「総論」は二章からなる。第一章「戦国楚簡と中国古代思想史研究」では、湯淺邦弘氏が戦国楚簡を取り扱う意義を明らかにし、戦国楚簡研究が中国古代思想史研究にいかなる再検討を迫るかについて概説している。第二章「新出土資料と諸子百家研究」では、浅野裕一氏が新出土資料の発見が諸子百家研究にどのような影響を及ぼしつつあるかについて紹介している。

第二部「思想史研究」は十二章からなり、文献の性格、伝世文献との比較、思想的特色等についての論考が掲載されている。各章の題目は以下の通り。第三章『「三徳」の全体構造と文献的性格』（湯淺邦弘）、第四章『「三徳」の天人相関思想』（湯淺邦弘）、第五章『「君子爲禮」と孔子素王説』（浅野裕一）、第六章『「相邦之道」の全体構成』（浅野裕一）、第七章『「内礼」の文献的性格』（福田哲之）、第八章『「季康子問於孔子」の編聯と構成』（福田哲之）、第九章『「荀子「天人之分」論の批判対象——上博楚簡が語るもの——』（菅本大二）、第十章「父母の合葬——『昭王毀室』——』（湯淺邦弘）、第十一章「語り継がれる

先王の故事——『昭王與龔之睥』——（湯淺邦弘）、第十二章『鬼神之明』と『墨子』明鬼論（浅野裕一）、第十三章『曹沫之陳』の兵学思想（浅野裕一）、第十四章『鮑叔牙與隰朋之諫』の災異思想（浅野裕一）、第五章『彭祖』における「長生」の思想（湯淺邦弘）。

第三部「字体・竹簡形制研究」は三章からなり、竹簡の字体や形制についての論考を掲載している。各章の題目は以下の通り。第十六章「出土古文獻復原における字体分析の意義」（福田哲之）、第十七章『曹沫之陳』における竹簡の綴合と契口」（竹田健二）、第十八章「上博楚簡『采風曲目』の竹簡の形制について——契口を中心に——」（竹田健二）。

本書は、日本国内において、上博楚簡の第四分冊・第五分冊所収の文献をいち早く取り上げた研究書であり、今後の国内外における戦国楚簡研究の発展に寄与する一書となる。

なお、戦国楚簡研究会の成果として、上博楚簡の第一分冊・第二分冊・第三分冊所収の文献を主に取り上げたものに、『竹簡が語る古代中国思想——上博楚簡研究——』（浅野裕一編、汲古書院、二〇〇五年四月）がある（提要（七）で解説済み）。

『郭店楚簡儒教の研究——儒系三篇を中心に——』（李承律著、汲古書院、二〇〇七年十一月、六六〇頁、縦組和文）

郭店楚簡に関する研究書。郭店楚簡と、他の文献資料とを比較考察することによって、中国古代の思想文化の特質及びその全体像を解明している。主に取り上げている文献は、郭店楚簡『唐虞之道』『性自命出』『魯穆公問子思』の三篇である。

序論「郭店楚簡と中国古代思想史研究」では、郭店楚簡と中国古代思想史研究について概説している。

第一部『唐虞之道』の堯舜禪讓説の研究」では、『唐虞之道』のメインテーマである堯舜禪讓説及び愛親と尊賢、さらに堯舜禪讓説を特徴づける利・養生・知命・謙遜の四つのキーワードを考察している。各章の題目は以下の通り。第一章『唐虞之道』の堯舜禪讓説、第二章『唐虞之道』の愛親と孝思想の特質、第三章『唐虞之道』の尊賢思想と先秦時代の尚賢論、第四章『唐虞之道』の社会的利思想、第五章『唐虞之道』の養生思想、第六章『唐虞之道』の知命と中国古代の命論、第七章『唐虞之道』の謙遜思想、おわりに『唐虞之道』の成立時期と所属学派、付章『唐虞之道』の本文・

訓読・口語訳。

第二部『性自命出』の性情説と礼楽説の研究』では、『性自命出』の中に見える自然秩序観と聖人制作説とが錯綜した状態にあることを手がかりに、性情論及び礼楽説が儒家内部でどのように展開したか、道家の性説と人為否定の論理とをどのように克服したか等の諸問題を考察している。各章の題目は以下の通り。第一章「問題の所在」、第二章『性自命出』の性情説、第三章『性自命出』の礼楽説―礼学の根源」、第四章『性自命出』の礼楽説の漢代儒教への影響」。

第三部『魯穆公問子思』の忠臣観の研究』では、『魯穆公問子思』の中心思想である忠臣観や、君臣関係を支える原理である爵禄と義をめぐる思想的歴史的背景等の問題を中心に論を進めている。各章の題目は以下の通り。第一章『魯穆公問子思』の忠臣観の特徴」、第二章「先秦時代の忠―まこと・まごころの忠と忠君・忠誠の忠」、第三章『荀子』臣道篇における忠のランクづけと『韓非子』の忠」、第四章「諸他の文献に見られる忠臣との比較考察」、第五章「爵禄と義」。

結論「郭店一号楚墓より見た中国考古類型学の方法論と白起拔郢の問題」では、以上の思想的検討に加え、考古学の視点から郭店楚簡の墓葬年代に関する諸問題を

再検討し、現在の一般的な見解（紀元前三〇〇年頃）とは異なった見解を提示している。